

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 3 NO. 2

昭和51年11月1日発行
編集・発行人 市原 正夫

〒280
千葉市中央港1丁目10番1号
☎0472-42-8311(代表)



香取秀真作「鳥置物」高松宮家蔵

観潮台

九月二十三日(秋分の日)、
国鉄千葉駅前と県立美術館の
間を往復するバスが運行を始
めた。この日、美術館員とし
て歴史を体験するため、第一
便の始発時刻三十分前に乗り
場、千葉そごうデパート前
に行った。

バスはもちろんきていなか
ったので、付近を散策中に同
じ思いの館員三人と合流し、
日曜日と祝日だけの運行とは
いえ、三年間の待望が実現す
ることを喜び合った。

九時三十分過ぎに、新車だ
という「県立美術館行」のバ
スが姿を見せた。静かに歴史
の展開を感じながら乗車した
ら、千葉市弁天町の高橋常吉
さんがお孫さんと共に乗りこ
んできた。定刻九時四十分、
この車は県立美術館行のワン
マンバス——のアナウンス
で発車したが、約七分で終点
の美術館構内に到着した。
陸の孤島から脱する第一歩
が始まったわけだが、会社や
陸運事務所などの関係者の努
力と誠意の結果だと、心に
い聞かせた。

(高橋在久)



特別展 香取秀真とその周辺
1976年9月21日(火)～10月24日(日)
9:00～4:30 月曜休館
千葉県立美術館
千葉県 文部省を語る。香取秀真 10月9日(日)午後2時

香取秀真の人柄と功績

はじめに

東京芸術大学の本部前に、平櫛田中翁作の「香取秀真先生像」が立っている。今回の特別展の会場では、入口に菅原安男作「秀真先生像」の木彫が、香取秀真の面影を伝えている。

子息香取正彦氏の「父は私や門人たちには極めて厳格で気の短い人であったが、一方では人情に厚く……」と語るところ、作家としての厳しさの背景にやさしさと正しさのある人であった。門人のめんどうをよくみて、また、思を

うけた人々に対しては、生涯感謝の念を忘れなかった。

香取秀真の胸像が、その謹厳な人柄を知るよすがになっただけで、思えばと思ふ次第である。

故郷印波

香取秀真は、明治七年一月一日に千葉県印旛郡船穂村(現・印西町船尾)に生れた。父は藏之助秀晴、母はたま。本名は秀治郎で、秀真はその号である。別号に六斎・梅花亭・道歎山房主人等がある。元旦に生れたことによると考えられるが、寒中に咲く梅の

花を好んでいたようである。郷里船尾は、印旛沼の源を発する土地であり、秀真の生れた当時は七八十戸程の農村であった。

先祖は、代々産土神である宗像神社の神官をつとめ、生家の香取家は分家であり、母たまは、本家の神主香取伊子正栄秀の一人娘であった。

明治十一年四歳の時、印旛郡佐倉町鑄木(現・佐倉市鑄木)の親戚である麻賀多神社神官の郡司秀綱の養子となった。あまりに幼かったので、一度生家にもどり、七歳の時再び郡司家に入ったという。

郡司幹雄氏の「香取秀真―伝統工芸の指導者―」(県立上総博物館「千葉県先覚展」)によれば、養父秀綱は、秀真を神主のあとつぎとして迎えたにもかかわらず、彼の才能をいちはやく認めて、郡司家の相当な土地を手渡してまで、秀真を東京美術学校へ送った。秀真自身、そのことについて感謝し、「私の東京遊学は養父の恩恵によるものである。」と記している。その後、香取姓にもどってからも、生涯養父母にも孝養をつくれている。秀真が、美術家になった背景に、養父秀綱の理解と援助が

あったのである。

郡司秀綱は、真淵門の流れをくむ国学を学んだ人であり、礼儀正しい人であった、と秀真は回想している。

十七歳で上京するまで過した佐倉は、進取の気風の盛んな土地であり、洋画家浅井忠をはじめ多くの先覚者を世に送った城下町である。

少年の頃の秀真は、縄文式や弥生式土器などを発見したり、仏像を観たり、勾玉を拾ったりして、折にふれて古美術への関心を深めていったようである。

今回の特別展に出品中の軸物に「故郷印波」の落款がみられる。秀真の郷土に対する想いが感じられ興味深い。

後年、帝室技芸員や重要美術品調査委員会の委員として、秀真が郷土千葉県古美術品発見の調査を行なうようになり、多くの文化財が保護された、と千葉県が県誕生百年を記念して出版した「千葉県の先覚」に記されている。

鑄金家・学者・歌人

明治二十五年に、秀真は東京美術学校に入学した。鑄金科は、明治二十二年に設置さ

れたばかりのことで、蠟型の名人といわれた大島如雲等に学んだ。在学中に校友会の展覧会があり、二等褒状を受けたが、「日本鑄工史稿」によれば、鑄金作品がこのような展覧会に出るようになった最初のことであったという。

明治三十年卒業後、鑄金家としての秀真の活躍はめざましいものであり、日本美術協会展で一等を受けたり、パリ大博覧会で銀賞牌を受けたり、以後も順調に受賞を重ねていく。

秀真の卒業した翌三十一年に、岡倉天心校長らが美校を去る、いわゆる「美校騒動」が起る。この頃秀真に助教授のポストが用意されたが、秀真はこれを固辞して、古代金工の研究を始めていく。

鑄金作家として輝かしい仕事を発表しつつける一方で、秀真は日本金工史の学問の先達として、丹念に金工史実の研究を行なっている。四十冊以上に及ぶ著作と、明治、大正、昭和と長年にわたって毎年発表された研究論文には、秀真の限らない探究心の結晶である。金工史家としても第一人者であった香取秀真の研究なくして、今日の金工研究はあ

り得ないと言われている。

また一方では、歌人としても活躍し、明治三十二年以来正岡子規の教えを受け、伊藤左千夫・萩真らと「馬酔木」や「阿羅々木」等の刊行に努力している。アララギ派の元老としても知られている。

鑄金家であり、学者・歌人としても第一線で活躍した香取秀真の業績は、天賦の才能とそれを上まわる努力とによるものと思う。

作歌活動については、一時中断しかけた時に、東京田端の隣人であった芥川龍之介に再び作歌するようにとすすめられたという。芥川は、秀真を「お隣の先生」と呼び、「僕は先生と隣り住みたるたゆ形ちの美しさを学びたり」と作品「田端人」に書いてい

るほど深い交際をしている。秀真は、鑄金界のみならず工芸界全体の発展のために尽力した。明治四十年、鑄金家の団体である東京鑄金会を結成し、幹事として活躍した。

大正八年には、工芸家の団結をはかる工芸済々会を、親友の板谷波山や津田信夫・赤塚自得・六角紫水・清水亀蔵らと共に結成した。

秀真ら工芸家の帝展加入を

めざす運動が実を結び、昭和二年第八回帝展に、第四部として工芸が設置されることになった。このことは、明治四十年文展が開催されて以来の工芸界の悲願であった。秀真は、板谷波山らと共に審査員に推された。

この間の苦勞を、秀真自身「明治三十七八年頃から、電車賃にも事欠きつつ、工芸の団体の為には頗る尽力して来た。展覧会の事務、審査の事務等現今の言葉で言ふならば「血の出る様な」真剣さを以て一貫して来た。」と語っている。

秀真は、明治三十六年以来、東京美術学校で鑄金史・彫金史を講じ、昭和十八年まで東京美術学校の教授として在職し、後進の指導に当った。

秀真の教えを受けた弟子たちもそれぞれ鑄金界に名をなし、近代美術史上における秀真の存在は誠に偉大である。帝室博物館学芸委員、重要美術品調査会委員、帝室技芸員、芸術院会員等を歴任し、わが国美術の発展と保存に貢献した。

昭和二十八年、鑄金家として初めて文化勲章を、陶芸家板谷波山と共に受章した。

特別展の中で

本展覧会には、香取秀真の作品七十六点を、香炉・置物・花瓶・茶釜・火鉢・銅印等に種類別に展示した。

さらに秀真の師大島如雲、友人板谷波山、弟子佐々木象堂・魚住為楽・北原千鹿・内藤春治・長野埤志、子息香取正彦の諸作品二十三点を展示している。

また、別室に「香取秀真とその周辺・資料展示室」を特設し、背景資料を展示し、金工史家として、歌人としての秀真の紹介を行なっている。

同時に、鑄金制作の過程を三十四枚のパネルによって、鑄金技法を理解する一助として展示した。

秀真の作品中、香炉が九点出品されている。明治以来、秀真が官展に出品したもののなかでは、香炉が一番多いようである。特に、昭和十六年以降、最後の日展出品作となった昭和二十八年作「みみづく香炉」まで、全て香炉の作品である。

秀真の門人で、彫刻家の大川逞一氏から「鳩香炉」が代表作の一つと目されている、というお話をかって伺ったこ

とがあった。

今回、展示中の「鳩香炉」の、秀真自身による箱書を見る機会に恵まれた。「この鳩香炉の作を境界として秀真の作品に一線を画すべし」(七十才の春四月)とあった。

制作年がはっきりしなかったのだが、表紙に「昭和十八年秋」とある秀真の図案帳の中に、この「鳩香炉」の下図デッサンをみつけた。そこには「十九年五月中儀凌成」「一月四日ノ図ニテ松坂屋巨匠展」とあるところから、昭和十九年の作品であると判った。

展示中の香炉を毎日観ていると、晩年になってくるにしたがって模様が単純化されてきて、造形的な面が強く打出されてきているように思える。模様はアクセントとしての意味からほどこされている。

「鳩香炉」を経て、昭和二十一年作「宝船香炉」以下「笑獅子香炉」「木菟香炉」「虎香炉」「みみづく香炉」と続く作品群には、香炉としての機能を持った置物といった意味の、造形的な変化が感じられる。

秀真の作風を古典的な美と一般に評されているようである。だが、これら香炉の近代

的な感覚には、その言葉だけではいきれないものがあるようだ。

おわりに

文化勲章を受章した翌年、昭和二十九年正月、秀真は新年歌会召人として宮中に参内した。その時の召歌を、資料展示室に展示した。

「新年同詠林応制歌、日本したくさのくちはのいろいろあかるきにならはやしひはあたたか
爾富類
歌召人として出かける朝にしたためた書を「絶筆」として展示した。

「一月十二日
鉢植の梅匂ふ家ゆ
新年の歌会にいそく
召人われは
めし歌のほまれ寿し
召人の仰せかしこし
語りつくべし

八十一老秀真
宮中よりもどつた秀真は、
風邪をこじらせ、床に臥した。
一月三十一日急性肺炎のため
世田谷の自宅で永眠した。
(学芸員米田耕司)

香取秀真文献目録

◎印本館所蔵

著 書

- ◎日本古鏡図録 明治45年 東京鑄金会
- ◎金銅仏写真集 大正元年 東京鑄金会
- ◎古京遺文(山田孝雄と共著) 大正元年 宝文館
- ◎日本鑄工史稿 大正3年 甲寅叢書刊行会
- ◎釜師系譜 大正3年 東京鑄金会
- ◎茶湯釜図録 附録新撰釜師系譜 大正3年 東京鑄金会
- ◎日本金燈籠年表 大正5年 東京鑄金会
- ◎好古山陰迷求利 大正9年 私刊
- ◎熊野新宮手筈と檜扇 大正10年 東京美術学校内工芸美術会
- ◎警 大正10年 東京美術学校内工芸美術会
- ◎金鼓と鱧口 大正12年 私刊
- ◎斑鳩の餘光—御物金銅大幡に就て— 大正15年 大雄閣書房
- ◎安民 昭和4年 私刊
- ◎新撰釜師系譜 昭和5年 私刊
- ◎金工史 昭和5年 雄山閣
- ◎支那の金工 昭和6年 万里閣
- ◎仏具 錫杖 昭和6年 日東書院
- ◎支那の古銅器 昭和6年 私刊
- ◎支那の金工について 昭和6年 啓明会
- ◎支那工芸図鑑 金工篇 昭和7年 帝國工芸会
- ◎日本金工史 昭和7年 雄山閣
- ◎和鏡の話 昭和7年 美術懇話会
- ◎新撰茶湯釜図録 昭和8年 宝雲舎

- ◎日本鑄工史 京都鑄工鏡師名譜 昭和9年 郷土研究社
- ◎水滴図解 昭和9年 私刊
- ◎隨筆ふいご祭 昭和10年 学芸書院
- ◎鉄瓶図録 昭和10年 私刊
- ◎佛像鑄造法 昭和11年 雄山閣
- ◎正岡子規を中心に 昭和11年 学芸書院
- ◎歌集天之真神 昭和11年 学芸書院
- ◎東大寺大仏の鑄造について 昭和12年 私刊
- ◎茶釜の歴史 昭和12年 創元社
- ◎茶器中の金物類 昭和12年 創元社
- ◎和鏡図解 昭和13年 私刊
- ◎大島如雲先生年譜 昭和16年 東京鑄金会
- ◎金工史談 昭和16年 樓書房
- ◎日本の鑄金 昭和17年 三笠書房
- ◎続金工史談 昭和18年 樓書房
- ◎御物釜と好みもの 私刊
- ◎精妙清華 私刊
- ◎梅華翁鑄印(二冊) 私刊
- ◎秀真先生印譜 昭和21年 樓書房
- ◎歌集還暦以後 昭和22年 香取秀真先生古稀紀念会
- ◎鑄物師の話 昭和22年 講談社

評 伝 等

- ◎江戸鑄物師名譜 昭和27年 私刊
- ◎香取秀真全歌集 昭和31年 中央公論社
- ◎日本金工談叢 昭和33年 中央公論美術出版
- ◎香取秀真氏 坂井犀水 美術新報 明治45年 二一九和4年
- ◎香取秀真 千葉県歴史 昭和4年
- ◎懷旧談1~5 アララギ 昭和24~25年 三二〇二、三二一、三二四
- ◎秀真翁 深川正一郎 ホトトギス 昭和26年 五三三
- ◎香取秀真先生の著書 柴田宵曲 日本古書通信 昭和29年 一九一三
- ◎香取秀真翁 館林唐一郎 日本美術工芸 昭和29年
- ◎香取秀真翁の片影 佐藤堅司 房総展望 昭和29年 八一
- ◎私の生涯 中央公論 昭和29年 六一
- ◎日本美術年鑑 昭和30年版 昭和31年 美術研究所
- ◎香取秀真の芸術と生涯(資料篇) 昭和30年 東京芸術大学鑄金教室
- ◎鑄金近代史稿 昭和32年 鑄金家協会
- ◎香取秀真の生立ち(房総美術風土記27) 中地昭男 千葉日報 48・8・5
- ◎香取秀真 千葉県の先覚 昭和48年 千葉県企画部県民課
- ◎香取秀真 千葉県先覚展 昭和48年 千葉県立上総博物館
- ◎佐倉地方文化財 第七号 昭和49年 佐倉市文化財保護協会
- ◎文壇資料(田端文士村)近藤富枝 昭和50年 講談社
- ◎近代日本工芸の巨匠展 昭和50年 千葉県立美術館
- ◎佐倉地方文化財 第八号 昭和51年 佐倉市文化財保護協会
- ◎下総神崎寺田家文学資料(二) 昭和51年 千葉県立上総博物館
- ◎日本芸術院史 日本芸術院事務局
- ◎芥川龍之介句集(我鬼全句) 昭和51年 永田書房
- ◎芥川龍之介全集
- ◎正岡子規全集
- ◎梵鐘 坪井良平 昭和51年 学生社

論文・随筆等

- 明治36年 ○新銅器談(新聞「日本」11月20日、12月2日)
- 明治37年 ○金工私見(東京美術学校々友会月報6月)
- 明治38年 ○近畿の金工作品調査一斑(東京美術学校月報7、8月・考古界11、12月)
- 明治43年 ○宣徳銅器を鑄たる材料(日本美術2月) ○江戸の鑄物師(東京美術学校々友会月報6月。日本美術8月)
- 明治45年 ○やまと琴(東京美術学校々友会月報7月)
- 大正元年 ○南部領内の古金文(考古学雑誌4・8月)
- 大正2年 ○足利ユキ(考古学雑誌) ○美濃国十六発見銅鐸(考古学雑誌)
- 大正3年 ○紀年について(考古学雑誌)
- 大正4年 ○釣鐘の寸法に就きて(考古学雑誌8月)
- 昭和3年 ○金属工芸に関する職人絵画の解(中央史壇1月) ○過去一年間に見聞の古工芸品(東京美術学校々友会月報12月)
- 昭和4年 ○原安民の事(芸天3月)
- 昭和5年 ○蠟型鑄物の話(工芸美術を語る)
- 昭和6年 ○支那の古銅器(書道全集10月) ○飛鳥時代の金工(東洋美術特集)
- 昭和7年 ○古金石にあらわれた雲文(宝雲1月) ○武蔵川口鑄工(埼玉史談3月)
- 周時代の工芸(学科智識7月) ○香取神宮藏鏡について(なか7月) ○奈良時代の金工(日本美術史三、奈良時代上7月) ○金銅五鈷鈴(宝雲8月) ○釜の話(茶と花10、12月)
- 昭和8年 ○奈良時代の金工(日本美術史四、奈良時代中2月)
- 昭和11年 ○日本工芸史概観(歴史公論1月) ○身辺雑観(塔影6月) ○ほづま雑記(阿迦雲7、8月)
- 昭和12年 ○支那の古工芸(塔影11月) ○上古の金工(歴史公論1月) ○近詠十九首(畫説1月) ○那智発掘の大日像(畫説4月)
- 昭和13年 ○釣鐘の話(科野雑誌5月) ○信州に遊ぶ(畫説10月) ○つり鐘の話(国史回顧会紀要12月)
- 昭和14年 ○中田の十一面觀音金銅像(芸苑巡礼6月)
- 釜師与次郎(星岡6月) ○函根より(畫説9月) ○誌上鑑定野溝釜(好古11月)
- 昭和15年 ○茶湯釜(星岡1月) ○迎皇紀二千六百年(美之國1月) ○金子静枝の伝記(畫説6月) ○法隆寺夢殿御厨子落慶供養(畫説7月) ○正木先生の薨去を悼む(畫説4月)
- 飛鳥時代の金工(国史辞典) ○江戸時代第一期の金工、第二期の金工、第三期の金工(国史辞典)
- 昭和16年 ○細口の花入(畫説8月) ○銘物花入(有明月)(畫説9月) ○茶湯釜の話(美術懇話会々報11月)
- 昭和17年 ○茶湯釜の歴史(茶道全集1月) ○唐物久兵衛(畫説1月) ○御正鉢(懸仏)について(古美術4月) ○金工清談(古美術6月) ○雲竜釜(畫説8月) ○愛知の鉄造地蔵尊(畫説9月)
- 昭和18年 ○決戦下の銅像供出(東京朝日新聞3月21日)
- 香炉釜(美術史学4月) ○鐘の話(美術史学8月) ○信州より(美術史学9月) ○歌碑除幕式挨拶 ○東大寺大仏造立年表(清閑11月)
- 昭和19年 ○鏡磨師の伝統絶ゆ(美術史学1月)
- 昭和20年 ○米奴を討つのみー戦争と古美術の保存ー(信濃毎日5月21日)
- 昭和21年 ○文房具を作った鑄師と蠟型いもの(翰林工芸9月) ○里山辺詠草(科野雑誌8月) ○さとやまへ(我流12月)
- 昭和22年 ○正倉院の金工について(正倉院の研究上) ○津田信夫先生銅像除幕式々辞(12月14日)
- 昭和23年 ○工芸談義(月明5月) ○芦屋作楓鹿図文鉄釜に就いて(国華8月) ○奈良時代の鑄もの(天平彫刻9月)
- 昭和24年 ○格堂の計(合同俳句1月) ○歌俳交互翻譯(舒8月) ○正倉院御物(報知新聞11月7日)
- 昭和25年 ○迦陵頻伽宝相華文金銅華鬘(国華4月) ○正岡子規居士の偈頌(大法輪4月) ○菊花双雀鏡(国華8月) ○桐竹鳳凰鏡(国華9月) ○阿弥陀堂釜のこと(須貴12月)
- 昭和26年 ○金銅仏像の造られる以前のいもの(ブディストマガジン2月) ○正岡子規を憶ふー五十年忌に際して(秋田魁新報 9月17日) ○子規居士とうた(ゆうびん10月)
- 昭和27年 ○岡麓君と私(アララギ5、6月) ○書籍雑誌(中央公論7月) ○銅鐸について(ブディストマガジン8月) ○東洋美術に就いて(天地人10月) ○子規先生の五十年(子規五十年祭協賛会刊「正岡子規」10月)
- 昭和28年 ○豆のり(月明1月) ○石井泰朗翁のこと(料理の手帖12月) ○ゆがめられた大仏(日本及日本人4月) ○地方研究論叢序(一志茂樹先生 還暦記念会刊11月)
- 昭和29年 ○撞き初め(大法輪1月)

注 論文・随筆等のうち、単行本となつて刊行されたものは割愛しました。



展覧会案内

第1回 千葉県秀作美術展
52年1月5日(水)～1月23日(日)

本館では、開館以来「近代房総の美術家たち」というテーマに基づき、物故者を中心に展覧会を行なってきました。そこには、郷土の先駆者たちが、千葉県内はいうまでもなく、我国の美術界に大きな役割を果していたことが再認識されました。

成に当たっている作家、或はこの伝統ある土壌に育ちながらも社会の急激な変動のなかで自己の道を求め苦闘している新進気鋭の作家たちが多数にのぼっております。しかもその中には美術界に重要な位置を占めるものも少なくありません。

このたびの展覧会は、本県美術文化の現状を総合的に鑑賞していただくため、千葉県在住、勤務、出身及び県内で活動している作家の過去二年間(昭和49年4月～51年3月)に団体展或は個展を通じて発表された作品の中から、美術

評論家・作家を代表する選考委員15名により日本画・洋画・彫塑・工芸・書・版画の六部門で選ばれたものを展示いたします。

常設 収蔵作品展

11月20日(土)～12月25日(土)

前年度まで、近代房総の美術家たちシリーズによってすでに紹介してきた、浅井忠とその師弟、原勝郎、椿貞雄、石橋武治、若木山、津田信夫、浜口陽三を加えた作家コーナーの他に、日本画・洋画・彫塑・工芸・書の秀作を選んで展示します。

浅井忠作・婦人像



第一回美術館友の会

作品展 好評裡に終る

10月5日(火)～10月17日(日)、友の会の作品展を開催しました。

これは、7月30日～8月1日・8月21日～22日に行なった2回の絵画実技講座―鉛筆デッサンから水彩画まで―に参加した方々の裸婦デッサン及び水彩画80点、更に友の会員の日頃の力作49点を加えて展示しました。

この実技講座は初めての試みであり、施設も不備の中で行なったものですが、皆さんのご協力により無事終ることができました。

デッサン会に参加された方々の約半数は何らかの形で日頃絵に親しまれている方でしたが、あとの半分は、描きたい気持はあってもなかなかその機会もなく、絵筆を持つのは学校卒業以来という方も少なくありませんでした。

講師の懇切な指導と参加者の熱心な態度によって予想以上の成果を上げることができ、展覧会も好評裡に終了することができました。

千葉県芸術祭

千葉県芸術祭 第28回県展

11月3日(水)～11月14日(日)

本県の美術家らの作品を広く紹介するとともに、県民の美意識を高め、郷土美術文化の振興と情操の純化に資することを目的に開催されるものです。一般からの応募点数も多く、美術への関心の深さを示すものといえましょう。

第8回千葉県高等学校芸術祭

美術・工芸・書道展

11月20日(土)～11月28日(日)

これは県内の生徒及び教員の日頃の活動と成果を発表する展覧会です。参加校は年々増加し、表現の幅も広がり、毎年意欲ある作品に期待がもたれています。

「千葉県の文化財」写真展

11月20日(土)～11月28日(日)

千葉県写真家協会の創立60年を記念し、協会の目的である「写真を通じて千葉県の文化向上に資する」事業の一環として、写真集「千葉県の文化財―建造物を二〇〇余名会員の総力を得て制作されました。この展覧会は、その中から抜粋したものを合わせ、一九七六年に於ける千葉県の文化財を記録して紹介するものです。

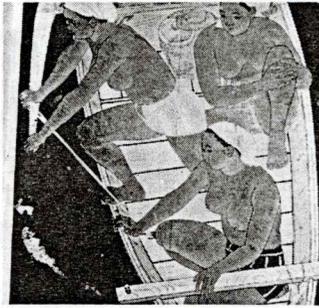
新収蔵資料紹介

昭和51年6月～9月

購入

若木山作・波上海女図

二曲一双のうち左隻

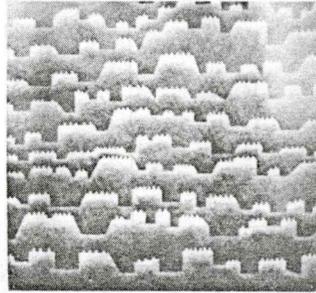


浅井忠作・風景(1)(2)・玉川・
鍛冶橋・兵士のデッサン5
点・大津絵7点



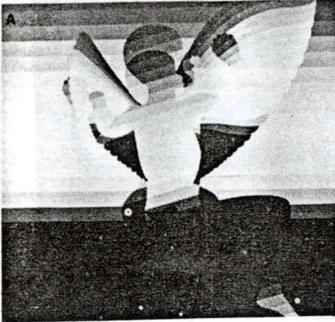
鍛冶橋

浜口陽三作・パリの屋根・ $\frac{1}{4}$
のレモン・ういきょう (銅
版画3点)

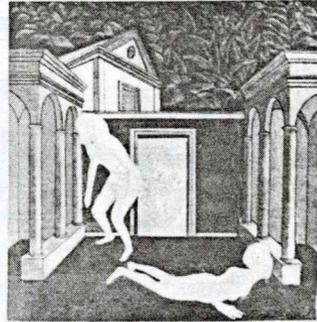


パリの屋根

雲嘔作・Angeles・Birds・
clouds・Hearts・Insects
(アクリル5点)



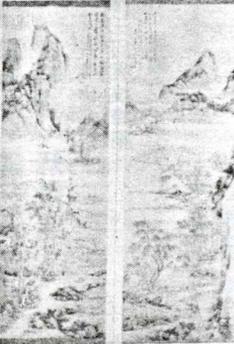
池田満寿夫作・トラベラーズ
ジョイ (銅版画集9組18枚)
トラベラーズジョイのうち



寄贈

左記資料をご寄贈いただ
きました。厚く御礼申し
上げます。

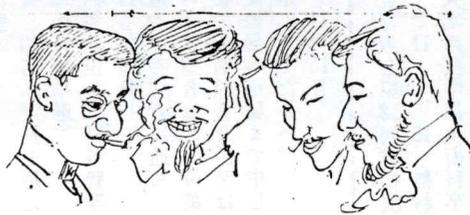
農耕の図



石井加代氏より 鈴木鷲湖作
農耕の図1点

浅井達士氏より 浅井忠作・
習作墨絵(まくり)21点、ス
ケッチブック3冊、スケッ
チ4枚、図案草稿6枚、写
本9冊、写本42枚、教科書
割付用草稿79枚

スケッチブック部分



都鳥成一氏より 浅井忠作・
武士の山狩墨線画(小)2点
二十会日誌、蛙の印材、天
燈鬼燈籠型スタンド。浅井
忠関係資料・武士の山狩制
作写真、使用絵具箱、教科
書割付用ケラ刷、手帳及び

日誌3冊、英文原稿6冊、
原稿及び写し6枚、黙語作
品集、家族写真、作品絵葉
書3枚、書10枚、短冊2枚
池田義象書簡。霜鳥之彦作
都鳥英喜像。

霜鳥之彦作 都鳥英喜像



道守由枝氏より 若木山作・
常陸乙女、安房ノ海乙女、
海女、池の春。

池の春

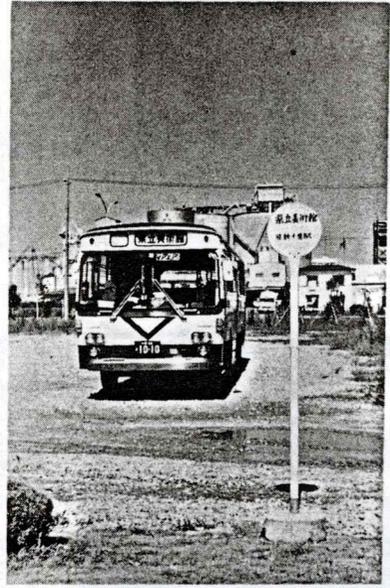


時刻表

	千葉駅発	美術館発
	そごうデパート前 (市役所行ポール) (美術館行ポール)	玄関北側
	9:40	9:55
	10:10	10:25
	10:40	11:00
	11:15	12:25
	12:40	12:55
	13:10	13:25
	13:40	14:20
	14:35	14:50
	15:05	15:30
	15:45	16:00
料金	大人60円	子ども30円

日曜と祝日にバス運行

9月23日(秋分の日)から日曜・祝日に限りバスが運行されています。ご利用下さい。



講演会・講座
講習会・解説会

第三回実技講座

版画のつくりかた

— 木版画 —

本年度第三回の実技講座として、年賀状などへ応用できる木版の講習会を開催します。下絵から彫る・刷るまでを初歩から指導し、どんなでも気軽に参加できる楽しい入門講座です。ふるってご参加ください。

主催 千葉県立美術館
後援 千葉県立美術館友の会

団体展

▼千葉市水墨画同好会展

10・5 ~ 10・10 無料

▼文化書道県連展

10・12 ~ 10・17 無料

▼第23回千葉県勤労者美術展

10・19 ~ 10・24 無料

▼千葉県大学美術連盟展

11・30 ~ 12・5 無料

▼第21回子ども県展

12・7 ~ 12・19 無料

講師 長谷川昂氏(日展・日

理学会員、県美術会常任理事)

期日 昭和51年11月27日(土)

時間 午前10時~午後4時

会場 千葉県立美術館研究工

作室

募集人員 40名(定員を超えた場合は抽選)

会費 無料(但し、材料費等は参加者負担)

用具 追って参加者に通知

申し込み 希望者は、往復葉書で美術館普及係又は友の会事務局まで申し込んでください。

締切日 11月15日

▼登龍社宮坂会第12回書初展

52・1・11 ~ 1・16 無料

▼千葉大学教養学部美術科卒業制作展

1・25 ~ 1・30 無料

▼第29回千葉県小・中・高校書初展

2・1 ~ 2・6 無料

▼千葉大学教養学部書道科卒業制作展

2・8 ~ 2・13 無料

▼第2回千葉県写真展

2・22 ~ 3・6 無料

▼第8回千葉市民美術展

3・12 ~ 3・27 無料

日誌抄

51年6月~8月

6月 登録博物館として県報に告示される。登録番号第9号昭和51年4月26日付

7月 松戸一中P・T・A来館

15日 多古中P・T・A来館

26日 松戸梨香台小P・T・A来館

30日 辰巳台中P・T・A来館

1月 仁戸名若草町内会来館

22日 30日まで博物館学実習を行なう。実習生6名

23日 子どもの絵展始まる。展示点数二〇四点

27日 8月1日まで絵画実技講座—鉛筆デッサンから水彩画まで—を行なう。参加人数40名

30日 木更津高校P・T・A、多古町教育関係者来館

6月 文化庁買上優秀美術作品展始まる。展示点数66点

7月 友の会役員会開催

9月 多古第一小・興新小P・T・A来館

17日 22日まで絵画実技講座—鉛筆デッサンから水彩画まで—を行なう。参加人数40名

21日

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21

21